翻刻

『滑稽奇談尾笑草』解題と翻刻

吉岡一志

解題

本稿で紹介するのは、竹塚東子が文化八（一八一一）年に刊行した噺本『滑稽奇談尾笑草』である。同資料は、既に平成二（一九九〇）年に武藤禎夫氏により翻刻されている[1]。ただし、武藤氏とは使用した底本及び翻刻方針が異なること、さらに、同資料が現在に伝承される「こんな晩」に連なる系譜を有しているという指摘をする点において、改めて翻刻を発表することに意義がある。

底本としたのは、大阪府立中之島図書館が所蔵するもので、書誌情報は次の通りである。

表紙　後補表紙。深紺色地に巻雲模様。
書型　中本（一七・八×一二・四センチ）。三巻合一冊。袋綴。
題簽　左肩、子持枠中に「東子作美丸画／滑稽奇談尾笑草／文化七年　合巻」の書き題簽。
見返　「滑稽／奇談／尾笑草／竹塚東子作／北川美丸画／浦島太郎亀放而／為陰徳／栄林堂販」。
構成　見返（半丁）、自序（半丁）、本文（十四丁半）、奥付ナシ。
版心　上部に「わらひ艸」、下部に丁付（一～十五）。
序　「自叙」。序末に「文化七午秋稿了　辛未春　発兒　竹塚東子誌印」。
作画者　十五丁裏に「竹塚東子作」「美丸画」。
話数　六話。
印章　見返に「合川蔵書」、一丁表に「大阪府立図書館蔵書之印」。

竹塚東子は、武州足立郡保木間村（現在の東京都足立区竹の塚）の旧家谷古宇（やこう）家に出自を持つ。菩提寺である常楽寺には今も東子の墓が残されているが、墓誌銘・過去帳には文化十二年十一月十三日に没したことは記されているものの、出生年月日は不明である。比較的裕福な家庭環境もあり、武州越谷（現在の埼玉県越谷市）で吾山に師事し、俳諧の薫陶を受けていることが知られている[2]。さらに、建部巣兆からは「旧友」と称されるほど深い交友関係にあったとみられる[3]。

また、生け花の師匠であり、さらには落語にも深く携わり、弟子を持つほどであったという。ただし、武藤氏は、職業的噺家であったというよりも、江戸落語の愛好者・支援者ではなかったかと指摘している。いずれにせよ、東子は、農民の出でありながら、文化的な環境に身を置き、幅広い人的ネットワークを持っていたことがうかがえる。

しかし、東子の名が今に伝えられるのはあくまでも戯作者としてである。とは言え、必ずしも東子が戯作者として成功をおさめていたとは言い難い。吾山の同門であった曲亭馬琴は、東子を以下のように評している。

千住の近郷、竹塚の農戸也。天明中、法橋越谷吾山の弟子にて、俳諧を旨とせしものなるが、文化に至りて合巻の臭草紙の流行を羨み、初は入銀などしつゝ、この人の作を印行せられたり。しかれども世に聞えたる佳作はなかりき[4]。

決して一流の人気作家とはいかないが、現在その存在が確認されている作品だけでも二十七点にも及び、当代の戯作者の一人としては、十分に名が知られていたのではないかと思われる。今回翻刻する『尾笑草』については、中本に限らず上紙摺の半紙本が出版されていることを鑑みれば、一定の読者が得られていたことがうかがえよう[5]。

こうした東子の活躍の背後には強力な後援者の存在が見えてくる。東子の戯作で最も古い寛政二年（一七九〇）の『田舎談義』の序文には山東京伝の名がみえる。東子の戯作者としての第一歩には京伝のバックアップが大きく関与していると考えられる。その後の作品の中にも京伝の名はしばしば添えられるが、

山口剛氏は、東子が京伝の名をはばかる事なく持ち出すことを「賣名」と非難し、「それが独走であらうと、模倣であらうと、彼にとつては名が世間に売れさへすればよいのであつたろう」と酷評している。[6] こうした近代的な価値観からの評価の有効性はともあれ、東子と京伝の密接な関係は非常に興味深い。ここでもまた京伝との縁を通じて、馬琴との接点もうかがえるのである。

京伝や馬琴との近しい関係にありながらも、東子やその作品に関する研究は極めて少ない。先述の馬琴による冷評からもわかるように、作品そのものの魅力にも欠ける。ただし、以上みてきたような、文化的背景や交友関係を踏まえると、『尾笑草』を別の観点からとらえることができる。それは、「こんな晩」という口承文学の系譜に位置づけられることである。『尾笑草』そのものは、滑稽奇談とあるように、どの話にも「落（サゲ）」が付く。特に二節の「恩金却嬰子ニむくゐ深夜飲酒」は現代落語「もう半分」の原型をなすと武藤氏は指摘している。先に東子と落語との関係に触れたが、「こんな晩」と「もう半分」は東子を通して結びつくのである。

「こんな晩」とは、「六部殺し」と総称される題名で今に伝えられる。そのバリエーションは多岐にわたるが、骨子は以下の通りである。旅の六部が殺され、金品を奪われる。その金を奪った者が後に子どもを設けるが、その子どもがある晩、「おれを殺したのはこんな晩だったな」と言うことで殺害された六部が正体を明かすというものである。

同様の話型は夏目漱石にも受け継がれ、『夢十夜』に収録されている。[7] 夢の中でのこと、六歳になる盲目の我が子を背負って歩いていくうちに、その子が「丁度こんなばんだったな」と独り言のようにつぶやく。主人公は問答を続けながらさらに歩いていくと、「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」と子どもとは思えない言葉遣いで声をかけられ、主人公は「盲目（めくら）を殺した」ことを自覚するというものである。夢の中での話で幻想的な設定であるが、「こんな晩」に依拠していることは容易に推測される。

一方、古典落語には「もう半分」という題目がある。『口演速記明治大正落語集成第五巻』には、初代三遊亭円左が演じた「最う半分」の口演筆記が残されている。[8]「もう半分」の概略は以下のようなものである。娘を売った百両で「もう半分」と茶碗に半分ずつ酒を飲む老人がいた。酒屋を後にした老人は、その百両を酒屋に置き忘れたことに気づいて取りに戻るも、酒屋の女房は横領して白を切る。金を失った老人は身を投げてしまうが、一方の酒屋の夫婦はその金を元手に繁盛し、後日子どもを授かる。その子の顔は件の老人にそっくりで、ある晩、その子が行灯の油を飲みながら、亭主に「もう半分」と言ったところで正体が知れるというものである。

「こんな晩」と「もう半分」はその内容が非常に酷似している。金を奪われた者が加害者の子どもに転生し、発言を通して正体が発覚するというのが双方にまたがる共通項である。「恩金却嬰子ニむくゐ深夜飲酒」では、金を貸した隠居が死後、借主の子となり「もふ一合くれろ」と呟く。しかし、借主夫婦は隠居の死後に借金を本家に返し、追善なども欠かしていない。つまり、わざわざ借主夫婦の子どもとして転生する理由がわからないのである。こうした不自然な筋立てが、東子の戯作者としての力量のなさを物語っていよう。

しかし、最も注目すべきは、東子の師である京伝、同門・同輩である馬琴も、作品中に「こんな晩」を採用していることである。前者は『安積沼後日敵討』に、後者は『新累解脱物語』にて用いられている。

「こんな晩」も「もう半分」も、その類話は古くまで遡る。「もう半分」の源流を中国の故事に見出そうとする福田素子によれば、金を奪われた被害者の霊が加害者の子どもに転生するという「討債鬼故事」は『日本霊異記』にも収められていると指摘している。[9] しかし、討債鬼故事は、その後『今昔物語集』に一話みられる他、中世では姿を消し、一七世紀を境に再び数多くの類話が生み出されるという。[10]

おそらく、京伝、馬琴、東子は、近世に至って広く流布していた討債鬼故事を各々が作中に取り入れていったのだろうと思われる。しかし、転生した者が「こんな晩だった」あるいは「もう半分」（東子においては「もふ一合」だが）というセリフを口にするのは、京伝、馬琴、東子が初出ではないだろうか。ここに、三者の影響関係を推測することもできよう。さらに、東子が落語の世界に深く足を踏み入れていたことを鑑みれば、落語「もう半分」の成立において東子はキーパーソンだったと言えるだろう。

これまで「こんな晩」と「もう半分」は、その系譜や成立過程に注目が集まっていた。しかし、ここで新たに指摘しておきたいことは、これらの話型に重要な役割を果たしているのが子どもであるという点である。子どもの社会史研究によって、中世における子どもへの社会的な関心の低さがこれまで指摘されて

きた。[11] 一方、寺子屋や子ども向けの絵本、さらには子育て本の普及をもって近世において、子どもの誕生が叫ばれてきたが、子どもに対するまなざしはやはり現代とは大きく異なる。

「こんな晩」は漱石を経由しつつ現代にも継承されており、その登場人物を大きく変えながらもかなりの類似性をみせる。大島広志が収集した噂話の中に「こんどは落とさないでね」というものがあり、「こんな晩」との関連が指摘されている。[12] 美男美女夫婦の間に子どもが生まれたが、その容姿が醜いために崖から落として殺してしまう。その後生まれた子は美貌に恵まれたため大事に育てていたが、ある日、件の崖の近くを訪れたとき、子どもに「こんどはつき落とさないでね」と言われたという。一九八七年に採取された噂話であるが、「こんな晩」をルーツにもつといってよいのではないだろうか。

ところが、そこには見逃しがたい違いが見受けられる。近世の話型では、被害者である大人が子どもの姿を借りて現れるのに対し、現代の噂話では子どもが別の子どもの姿を借りて語り始めているのである。つまり、近世から現代にかけて、子どもは声を発しない存在から、自分の声で自己主張するようになったと理解することができる。子どもはもはや単なる依代ではなくなったのである。

このように「こんな晩」や「もう半分」は、子ども史を見ていく上で欠かせない資料である。まだ十分に資料にあたる余地はあるが、近世以前に子どもが幽霊や妖怪の類に変化するという事例は極めて少ないのではないかと考えている。おそらくは、子どもの自我の捉え方が現代と大きく異なることが要因であろう。こうした前近代における子どもへの人びとのまなざしを解明していくために、本翻刻資料は重要な資料の一つとして位置づけられる。

注

(1)武藤禎夫「翻刻『尾笑草』」『共立女子短期大学文科紀要』第三十三号、一九九〇年。
(2)永井啓夫「竹塚東子の環境」『語文』第五十六輯、一九八三年。
(3)本多朱里「竹塚東子の戯作」『国語国文』第八十六巻五号、二〇一七年。
(4)曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』（岩波文庫、二〇一四年）
(5)前掲(3)
(6)山口剛「竹塚東子の賣名」『山口剛著作集』第六巻、中央公論社、一九七二年。
(7)夏目漱石「夢十夜」『漱石全集』第十巻、漱石全集刊行会、一九三七年。
(8)『百花園』第二百八十号（一八九九）に掲載されたものが、『口演速記明治大正落語集成』第五巻（講談社、一九八〇）に転載されている。
(9)福田素子「落語『もう半分』に見る中国怪談・討債鬼故事の受容と変容」『中国：社会と文化』第二十七号、二〇一二年。
(10)堤邦彦『江戸の怪異譚』（ぺりかん社、二〇〇四年）
(11)フィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生』（みすず書房、一九八〇年）
(12)大島広志他『ピアスの白い糸』（白水社、一九九四年）

翻刻

〈凡例〉

一、読解の便を考慮して、適宜、句読点・濁点・括弧を施した。
一、翻字に際して、序文及び説のタイトルをのぞき、原文にはない漢字を宛てたが、原文の平仮名はルビとして残した。原文の漢字表記にルビがある場合は、括弧書きにルビを付した。
一、漢字は常用漢字を原則として通行の字体を用いた。
一、踊り字の「〻」「ゝ」「〳〵」は原文のままとしたが、漢字の後の「〻」「〳〵」等は「々」に統一した。
一、虫損等で判読不明の箇所は、およその文字数を□で示し、右脇に（ムシ）と注記し、虫損の程度によって推測できるものについては括弧書きにした。

自叙

旧時浦島太郎が亀を放して竜宮城にいたり、玉手箱と面白き咄を買出して家に帰り、その咄を長く忘れまじと絵に書て壁に張置しより、今の世まで此言たへずいひ伝ふとかや。是を考へ侍るに、亀を放すは則はなし亀也。絵に書ひて壁に張は、是所謂はなし壁也。此響き五音の似たるをもて、かゝる言草とはなりぬべし。今世笑話家群をなし、席を高くして新説を弁じ、又題を得て即座に咄を造ること早く、李白が酒吐よりもすみやかなり。おのれ年々咄の種を植て

そのたねを取るに、此秋も唯五ツ粒を得たり。是を瓢に秘め置侍りしを、板元が需いなみがたく、終に手をはたきて贈ことはなりけり。是を絵に書、壁ならぬ青本三冊子となして、咄の種を蒔て笑ひの花咲春、嬰児がな□さみ草とはなしぬ。

文化七午秋稿了
辛未春　発兒

竹塚東子誌 印

（一オ）

「一説　皿ト供ニ身失テ古井戸ノ冤魂」

昔播州何□か言へる里に有徳なる大百姓あり。例年秋の頃、初鮭の魚にて親類又は心安き人々を招き、出来秋の寿として振る舞いをなしけり。此ときに寄り合ふ人々も、皆々大百姓なれば、器物も秘蔵のものを出して、全部立派にして振る舞いをなしけり。又、此家に先祖より伝はりたる大切の皿十人前あり。何焼といふ事も知れざれども、世に稀なる皿の由にて、最も秘蔵なしけり。さて、今年も鮭の魚、初に獲れしと出入の魚屋より持参せしまゝ、明日振る舞いをせんとて、早速廻状を出だしければ、皆承知よしにて、使い帰り来たれり。よつて主定例の通り、料理人へ献立を渡し、自身文庫蔵に入、かの大切の皿を取り出し来たり。召使いの下女、これは幼年の時より抱へ置きて事慣れたる者故、例年の通り申渡し、「此皿の係りはいつものごとく、その方一人にて預かり、大切に取り扱ふべし」と申渡しけり。さて、明くる日にもなりければ、昼時客人も揃い、色々料理を出だして、小漬け飯の時、かの鮭を焼き、向かふへつける事、これも定まりなり。客は亭主ともに十人にて、皿も十枚用ひけり。しばらくもてなしありて、膳も引けたりければ、皿は預かりの下女、他の事には構はず、手前が引き取り仕舞いする時、この客の内一人、鮭を食ひ残し置きけり。此下女、此鮭の残りに心を奪はれ、つぎへつゞく

「此皿が無くては、さらに寝食やすい皿ではない。さら〳〵疑い晴れ申さん」

「ハイ、今皿一言の申訳はござりません。さらば尋ねてみませう」

（一ウ・二オ）

皿のま、脇へ除け置きて、残り九枚を洗いけるうち、いつの間にか手飼いの犬這い上り、鮭を皿ともに咥へて、いづちへか逃げ行きけり。下女は皿を洗い仕舞いふ□□りて、鮭の入□□皿を見るに、無ければ、大きに驚き、「いかゞせん」と途方に暮れていたりける時、亭主「早く皿を持て来い。改てみる」とあるに、なを〳〵うろたへ、しばし暇取れし故、亭主此所へ来たり。見れば一枚足らず、九枚ある故、大きに驚き、「おのれいづくへやりしぞ。有様にぬかせ」と責めければ、有様に言ひけれど、聞入なく、残る皿と下女を居間へ連れ来たり。「此皿無くては先祖へ申訳なし。己が盗みしに違いなし」と□手小手に縛り上げ、親、請人を呼び寄せ、「□の皿を尋ね出して持参なすべし」と、もつてのほかの憤りなり。下女が親も請人も恐れ入、色々詫びして縄を解きしが、「皿の出るまで部屋へ入て、食止めをすべし」と、既に十日あまり下女は食を止められて堪へられず、「とても死んでしまいて此憂き目を逃れん」と夜に紛れ忍び□□、裏の古井戸へ身□□げて死たるは悲□ける。此夜、りして、井戸のもとへ怪しき姿の幽霊現れ出、悲しき声を上ゲて、「十日の夜、飯を食わねば堪へられず、この古井戸へ身を投げたり。あァ冷や飯いなァ。あァ引皿が減つた」

「此一丁、合印をよく〳〵見分けて読みくれ給へかし」

「そりや出たぞ〳〵〳〵。ヤァ〳〵」

」（二ウ・三オ）

「二説　恩金却嬰児ニむくゐ深夜飲酒」

昔、本庄割下水辺に若き夫婦者の居酒屋有。此男、下町筋の良き酒問屋に年季奉公を勤め、随分実体にして、もはや掛回りになりしところ、その店不仕合続き、遂に身上をしまい、本国美濃国へ引込みけり。これによつて番頭、若い者、丁稚まで皆暇出けり。しかるに、此者の本国は近江にて、親元はいさゝかの百性にて、兄の代なりければ、国元へも引込まれず。主人より暇の出る時、それ〴〵へ給金の心づけありしまゝ、此男も金子十両もらい、中宿へ下がり居けるが、「かゝる繁華の土地にて仕出さぬといふことあるまじ。今さら奉公稼ぎなしても中年者なれば、出世もできまじ。此金をもつて煮酒屋でも始め、根限り稼ぎてみばや」と親分に相談なしければ、「随分夫がよかろう。とても一人にては埒のあくまじ。奉公人を抱へても元手が少なくては、尻が見へて悪しゝ。幸い俺が姪が、此節浪人している□□これを女房にして共稼ぎにした□□かろう。本庄辺に俺が兄弟分があるから、此男を頼んでやろう」とし□□だんして、かの姪をもらい女房になし、本庄へ行きて相談なしければ、幸い居酒屋の売据ありて、つぎへつゞく

「貴様たちは実体な人たちだ。おしつけ大商人に仕上げるだろう」

「ハイ、何分お頼み申し上ます」

―（三ウ・四オ）

金五両に買いて残る金を元手となして、親分が懇ろに世話し□□いをもたせければ、一ツ体此□男近江者にて、商いの道に賢く、世辞もよく、又女房も器量十人並みにて愛想よく、夫婦ころ〳〵して働き、商売をなしければ、日増しに繁盛なしけり。しかるにこの裏長屋に浪人の隠居あり。株早う子に譲りて、分米をとり、少しの蓄へありて、一人暮らしなるが、酒好きにて、此酒屋へ毎々寄りして、毎日二三度□□来たりて、一合づゝ飲みけるが、今度の亭主、若い者には珍しき稼ぎ手にて、その上夫婦とも愛想よく、隠居を大切に酒も計りをよく出す故、大きに気に入、毎日来たりて酒を飲まれけり。さて夫婦、隙間なく稼ぐといへども、細元手故、お釜返しの繰回しを、この隠居、常々見られて思ふやうは「此者どもは、誠に実体なる者也。少し元手を貸し使はさば、忽ち仕出さんもの」と、ある日、酒のみ□□れ、折節他に人も無ければ、亭主を招き、「さて、□様たち夫婦は誠に貞実な者なり。元手を今少し入て、手広く商いを為さば、まだ繁盛もすべし。元手の才覚は出来ぬか」と言へば、「仰の通りでござりますれど、外に才覚も出来ませぬ故、夫婦身の油を絞りまして稼ぎます。どふぞ元手が欲しいものでござります」と言ふニ、隠居の曰、「その元手を俺が貸してやろう。しかし多くもなし。死金ニ残したるが五十両ある故、これを利安に貸してやろうから、先ヅやつてみ給へ。

「おそろしや〳〵〳〵」

―（四ウ・五オ）

その代はり俺が病み患いの時、目をかけて□され」とあれば、夫婦大き□喜び、その金を借りて酒は元より、その他色々仕入、商い□□暫時の間に大商人、なり、番頭、丁稚を抱へるやうになり、ひとへに隠居様の御恩と、朝夕、主、親のごとく大切に酒を勧め、もてなしける。時に此隠居、卒中風にて死なれける故、早速本家へ通じ、右の金子を返し、懇ろに香典など出して、共々追善の供養しける。その後女房懐妊して男子を産み、今年二才になりける。これに乳母を置き、育てけるが、ある夜乳母が懐を這い出て、いつの間にやら、ちろりへ酒を入、茶碗を持ち、恐ろしき顔をして飲みける。乳母これを見て肝を潰し、夫婦へ話しければ、次の夜、亭主隙見をなすに、乳母が言へるごとく、その顔、浪人者の面体なれば、大きに恐れ、番頭に話し、「祈祷でもなさん」と言へば、番頭の曰ク「それはお前の気の弱りでござる所へ、狐狸がつけ込んでするのでございます。今晩、私が試してみませう」と、力み返つているに、丑三つ頃、かの小児、乳母が懐を抜け出で、いづくより持ち来たりしや、ちろりを右の手に持ち、茶碗を左の手に持ち、ぐつと飲んでしまい、番頭をはつたと睨み、「コレ、番頭〳〵」。番頭、五体すくみて震へながら、「ハイ」と言へば、「もふ一合くれろ」。

「さア□□□らだ中が震へてたまらなくなってきた」

―（五ウ）

「三説　肝夫肝婦が罪ハ刀祢川よりふかく悪名ハ衣服ト供ニ乾ス」

昔、下総刀祢川の辺に鎌とり村と言へる有り。此所の村長は、羽口芝右衛門と言ふ。代々庄官を務めて、身分も相応に暮らしけり。今の芝右衛門が妻は去年の春身まかりけり。芝右衛門、齢既に六十なれど、跡式を譲るべき子もなく、久しく召使たる下女のおなべと言へる女、器量も人並にて内の勝手もよく覚へしまゝ、いつとなく此者を妾として家事を打ち任せけり。さて又、芝右衛門が弟に芝七と言へる者ありけるが、これは親の存生の砌、家持に出し別家成して、農業を営みけり。此芝七、一人の男子あり。年十七才の時、時疫流行りて、夫婦とも身まかりける。十七才の倅芝吉に家督を継がせけるが、未だ年ゆかぬ故、悪しき友に勧められ、良からぬ事にかゝり、又は女郎狂いして、一、二年のうちに身上散々にして、所持の点地、家屋敷まで売りて、その身は江戸へ出て、鍋鋳掛けを仕習い、よう〳〵一人口を過ぐしけり。

「当座の花なら止してくんねへ。後で気が揉めやす」

―（六オ）

しかれども、とかく身持ち悪しくして、江戸にもおらず、処々方々を渡り日を送りしが、古郷懐かしくや思ひけん、我が古郷鎌とり村へ来たり。心安き人を頼み、伯父なる芝右衛門方へ段々詫び入ければ、「彼が身持ちさへ直らば、随分世話して百姓に取立やるとも、又我も未だ世継ぎもなければ、彼が辛抱次第でいづれにもなすべし。しかし此事は、決して彼へ話し給はるな。よく〳〵心を見届けざればならぬ故のことなればなり。今は鍋鋳掛け渡世すると聞、し故、幸いわしが長屋が明キあるから、これに住ませて稼ぐようにきつと話して下され」とある故、世話人も喜び、早速芝吉にかくと申聞かせて、伯父の長屋

へ所帯を持たせけり。誠に「親は泣き寄り」と言へる諺のごとく、血筋なれば、伯父も随分不憫を加へて、世話なしけり。殊に此芝吉、読み書きを相応にすれば、何かのことにつき、芝右衛門が手助かりになりける故、商いの暇の時は、朝夕芝右衛門が家にありて、家内の世話をなし、他事なく実体に働きければ、芝右衛門も大きに喜び、我が子のごとく慈しみける。されば「喉元過ぎて熱さを忘れ、焼木杭には火のつきやすい」と言へる諺のごとく、芝右衛門が妾のおなべと人知れず密通なして、「もし伯父が死んだら、此身上を俺がものにして、そなたと夫婦になるべし」など、よからぬ心を起こしけるぞ浅ましき。さて、芝右衛門は老人といひ、殊に心良にて、彼らが姦通なしてゐるをつゆばかりも悟らず、良き手代でも抱へたる心にて、万事用向、家事を彼にはるらはせけり。ある時芝右衛門、県の御用につき、鎌倉出ることあり。留守の事、万事芝吉に申置き、「随分留守中、御用向、その外差し支へなきやうにいたすべし」と申渡して出府なしたり。時に、二人の者は天の与へと大きに喜び、思ひのまゝに楽しみけり。此時妾おなべが芝吉に向かい、「旦那殿は今の分では中々五年や七年で、中々死ぬ事□□あるまじ。便々としてゐる内に、ひよつと此事が現れなば、水の泡也。此度の留守を幸いにして家財を残らずひつ攫い、船に積みて知らぬ国へ行きて、二人リ心のまゝに楽しむがよかろう」と勧められ、もとより悪性の芝吉なれば、何の思案もなく「これは妙計なり。さあらば一時も早く家財衣類を取り出して荷物に拵へ、今夜すぐに立ち退くべし」とそれより妾は蔵に入り、金になりそうな諸道具、有り合いの衣類、又芝右衛門が後に残せし金銭まで荷に造り、又芝吉が長屋にある人の方より直しに来る洞庫、薬缶、鍋、釜まで荷に造り、裏は刀祢川なれば、その夜四ツ過ぎに舟に積み、

つぎへうつる

「留守はべつして気をつけてくりやれ」

「かしこまりました」

「随分ゆる〳〵と五、六十日もおかゝりなすつて、芝居でも御覧じてお帰りなさりませ」

」（六ウ・七オ）

まへのつゞき 家内を抜け出て、二人とも舟に乗り移り、ほつと息をつきけり。さて、此家には他に下女一人、小野郎一人ありけるを、銭をやりて遊びに出しければ、外に知る者さらに無かりけり。されば芝吉「時分はよし」と舟を漕ぎ出し、川上へ三、四丁も漕ぎ上ると、不思議や、今まで良き天気なりしが、一天墨を流すがごとくになり、大雨、大風、大雷すさまじく鳴りはためき、舟は巴のごとく、廻りければ、二人は肝魂も潰れて、泣くにも泣かれず、神仏の御名を唱へけり。時に一陣の風、さと吹きたり。舟を覆しければ、無惨や、二人とも川中に落入けり。しかるに芝吉は、水心あれば、よふ〳〵岸の柳にとりつき、辛き命は助かりけれど、妾のおなべは行き方知れず流れ失せけり。悪の報いぞ是非もなし。芝吉は濡れ鼠のごとく土手へ這い上りけり。此時、天、元のごとくに晴れて、二十三夜の月清光として上がりけり。さて、濡れたる衣類を絞り、しばらく土手の上に佇み居て、おなべが事、伯父の罰にてかゝる憂目に遭いたる事をつく〴〵と運心なし、「今かゝる様にて、いづくを指して行かるべき。我も身を投げて、おなべが後を追ひかけん」と覚悟を極めしが、さすがに命惜しく、又心を取り直し、「とかく命が物種也。元の鍋鋳掛けとなつて、その日を暮らすも気楽なり。此寂しき長堤、念仏も塞ぐ」と声張り上ゲ「鍋、釜、妾、薬缶、道具流し」。

」（七ウ・八オ）

「三説　忠烈の乳母が精心馬と供に千里へ奔走して馨」

昔、足利将軍、相州小ざゝが原において、けだ物狩りを御催しあり。その砌、御家来の御大名衆の御子息たちの馬術を御覧あるべき由、仰出されけるまゝ、十二才以上の子息ある方々、各々その前広に馬術を鍛錬なさしめられけり。こゝに長崎十郎左衛門のぶしげと言へる軍功の名家あり。御子息二人あり。惣領由若十三才、弟なりわか、十二才なり。しかるに兄の由若は、生れつき発明なりといへども、虚弱にして武術に少し疎く、文学のみに心をゆだねけり。又、弟のなりわかは、兄と違ひ心ざし猛く、とかく六ツ七ツの頃より馬を好みて乗り、今年十二才なれども、あつぱれの乗り手なり。よつて、親のぶしげも「此度の誉れは、彼が上に越すべき者あらず」と心の内に十分の勇みをなしおりけり。されば兄弟二人ありながら、一人の弟のみばかり右の御狩に出されず、兄弟とも華々しく仕立出さんと、由若に馬術稽古を為させけれど、生得嫌い故、とかく熟練なさず、弟のなりわかは元より好むところ故、この程は、名人と言ふとも恥づかしからぬ位にして、あつぱれの達人になりけり。此二人の子どもに乳母ありて、弟のなりわかゞ乳母は、我が養い君の馬の上手を鼻にかけ、由若ゞ馬のできぬをさみし、心の内には、したりぶりしていたりける。又由若ゞ乳母

は「我が和子の馬の嫌いにして、此度の御用にかけ給はゞ、御家督も弟御のものにやならん」と大きに心を痛めける。さて御狩の日限も近よりけるまゝ、馬術の下見分、近日、扇ヶ谷において執権職御覧あるべき御沙汰ありける。家々にても、稽古を励みける。のぶしげが方にても、弟のなりわかは気遣いなしといへども、兄の由若未熟なる故、大きに気を苛ち、由若を呼びよせ申けるは、「汝武士の家にありながら武芸に疎く、殊に馬術□心がけねばならぬけい也。しかるに文学のみになづみ、此度の つぎへうつる

「両人ともに出精して馬術の誉れを顕し、御狩のお役に立ちませい」

「弟の曰、委細承知仕りました」

」（八ウ・九オ）

御用に立ゝざれば、あるに甲斐もなき次第なり。殊更汝、此家を相続すべき者なれども、その器量あらざれば、是非も無し。又、弟なりわかは、武術に心を用いて此度の眉目を開かんとなす。二人ある倅、一人は馬術の出来ぬとありて、此度の御狩に漏れなば家の恥辱、某が瑕瑾なり。しかれども、その技のならぬものを、押して出さば、恥の上の恥なればその方は病気と披露し、弟斗出すべし。しかれば此後、その方は僧、法師ともなりて世を捨てゝ然るべし」と怒りの眼に涙を浮かめて申渡されければ、由若は一言の応へもなく、「段々の仰、恐れ入奉る」と応へも涙にしほ〳〵と座を立ち、我が部屋に入り、「とても永らへ生きて恥を晒さんより、腹切つて相果てん」と唯一途に覚悟極めしぞ、あはれなり。さても由若ゞ乳母は、この程より此事を心に思ひ、「我死しても此度養い君の恥を雪がん」と密かに夜な〳〵忍び出で、鶴岡の八幡へ願を掛け、水を浴び、断食をなし、「我が一命をめされ、和子様の馬術にすゝみ給ふやうになし給はれ」と一心に祈り、七日目の夜、舌を食い切死したるは、忠義稀なる女子也。しかるに由若はいよ〳〵自害せんと覚悟を極め、書き置をしたゝめんと硯引き寄せける時、頻りに眠気を催しけるまゝ、色々心を励ましけれども、詮方なく、ついにとろ〳〵と居眠りし夢のうちに、乳母が姿、怪しの有様に□現れ来たり。「いかに養い君、よく聞ゝ給へ。わらはことは、御前様のために、八幡様へ命をあげ、今は此世になき人なり。此度の御狩に外れては、家の恥辱と父上様の御憤り、僧、法師ともなれとの御言葉に御恥入て、今切腹の御覚悟、御もつともとは思へども、わらは死しても御前様に御手柄がさせましたく、

やみくもにつぎへうつる

「南無八幡大菩薩。帰命頂礼〳〵」

」（九ウ・十オ）

我が心魂御前様と、又お乗りなさる馬に乗り移り、あつぱれ馬の名人になさせますから、御切腹をお留まりあそばして、下見分の日までお部屋に引こもり、八幡様をお祈りなさるべし。その日弟御の乗り出し給ふ時、身ごしらへして御前様の馬を引かせお乗りなさるべし。少しも御疑いあるまじ」と、涙ながらに申ける。由若、夢心に、「さては乳母は我故に死たるか。不憫やな。兎にも角にも乳母が心に従はん」と思へば夢は覚めたりけり。由若、夢の内に得道なしけるまゝ、乳母が言ふごとく自害を留まり、部屋に引きこもり、その日を待ちいたりけり。ほどなくその日にもなりければ、弟のなりわかは、装束立派に出立ちければ、両親並びに乳母が勇み、大方ならず、家来馬を引き出だせば、ひらりと飛び乗り、広庭を乗り回しけり。此時、部屋に引こもりいたる兄の由若、いつの間にやら支度をなし、自ら馬を引出し、ひらりと飛び乗り立ち出ければ、人々驚き、「あれほど馬の嫌いなるもの、此有様、不思議〳〵」と驚くうち、馬上より謹んで「御父様、御母様、必ずお案じなさるまじ。いざ弟」と言ふより早く、一鞭あてゝ駆け出だし「ハイ〳〵〳〵。うばしや〳〵〳〵」。

」（十ウ）

「四説　芸は身を補といへども驕慢して面箱を失ふ」

昔、京都四条河原へ勧進能ありて、此能へ出づる男あり。元は由ある武士の果てなるが、薄命にして、貧窮がおよび、能芝居へ出で、いさゝかの賃金を取りて、生業の助けとなしけり。春頃、いづれの盛り場もにぎはしく、能芝居へも見物多ければ、毎日弁当を用意なして通ひけり。今日もかの所へいたり、夕暮方、我が家へ帰る心にて来たりしが、いかゞしたりけん、いつも通らぬ川端筋へ出たり。手前も合点ゆかねば、不思議に思ひ、「はて、合点のゆかぬ事じや。こゝはいづくにや。ついぞ通らぬ川端なり。さては稲荷山のお中間衆がつまみはせぬか」と眉毛を濡らし、気をしつかりとして歩み行くに、どこまでも川端ばかりにて人にも会はず、家もなし。「さてはつまらぬ目に会いし」と思へども、今更後へも帰られず、刻も何刻なるやら知れず、殊に雨は降らねど、空は真黒にて、もの、文色も見へざれば、「こはけしからぬ、こいつはけしからぬ」と久しいもんだが、松村のお客のごとく一人呟きけれど、せん術なければ、「な

んでも狐に化かされたには違いなし。かゝる時には先ヅどつかりと下に座りているがよい」といふ事と、背負いたる面箱を下ろし、大地に大あぐらをかき、心の内に北野、天神、愛宕山などを念じいたりけるところに、一ツの青き火の玉飛び来たり、目の前へふらつくと、等しく異類、異形なる化物、あるいは一ツ目、女の首、二ツ頭の大坊主など現れ出でけれども、此男、元より武士の果てなれば、つぎへ

「春の日も早暮かゝる。しかし長い日であつた」

」（十一オ）

わつと言ふて、倒れもせず。されども、その恐ろしさ例へん方なければ、震へ〳〵脇差しに手をかけれども、惣身すくみて自在ならねば、恐ろしながらも、睨みつめていたりけるに、かの化物、中の大入道、大口を開き、雷のごとくの声をして、「いかに浪人、よつく聞け。おのれ生覚への能を鼻にかけ、高慢ばかりぬかし、長屋のものどもを卑しめ、その上店賃もろく〳〵やらず、銭もないくせに酒ばかり食らいたがり、酒屋を借り倒し、その他以前が武士じやなんど、人の言葉咎めなどをなし、不実千万、言語同断な奴なり。それ故に、おのれは主人へ不忠をなし、今浪人の艱難をなす。これを諸天憎み給ひ、我々に仰せつけられ今日只今糾明をなす。みんなが来て此不実者を叩き給へ」と言へば、残る化物ども、浪人をひつ捕らへて、さん〳〵に打ち叩く。浪人涙をこぼし、色々詫び、もひとつつぎへ

「この欲張り浪人め、二人前で睨みつけるぞ」

一ツ目が言ふ、「俺は本所の生れだぞ。本所骨を叩き直してやろう」

「この意気地なしめが。覚悟ひろげ」

□□□つけてとつともふ益体な和郎じや。かにしておかれんわへ。やつぱり、これが悪くしやれかうべだ」

」（十一ウ・十二オ）

けれども、ちつとも許さず、なを〳〵ひどく打ち叩きければ、「うん」と言ふて気絶しけり。化物どもはこれを見て、手を叩き、どつと笑つて消へ失せけり。かゝる所へ、提灯を下げて人の通りかゝりて、此体を見て側へ寄り、呼び立つれば、此声の通じけん、息吹き返し、呆然としていたりけるに、かの男「貴様はどこの人じや」と尋ねられ、よう〳〵心付き、辺りを見れば、常に通る三条の裏道なり。「私はかやう〳〵」と委細を述べ、「おかげで助かりました」と一礼を言へば、「貴様、それは狐に化かされたのであろう。早く家へ帰らしやれ」と言ひ捨て、別れけり。さて此男、面箱も見へず、今日の立前もどこへか落としてしまいけれども、未だうつかりとして本性にあらねば、やつぱり面箱も銭もある気にて町へ出けるに、もはや四ツ前にて酒屋は店をしまはんとするところへ、すつと入り、「一杯飲んで気を付けん」と、四文の酒を三合、肴を誂へて、息もつかずに飲み仕舞い、銭を払はんと懐中を探せどなければ、「もしや面箱の中へでも入れはせんか」と尋ねて見て、はじめて心付き、「これはしたり。さてはさつきの騒ぎに失いしならん。いかゞせん」と工夫をなし、亭主に向かい「某事は、四条河原へ出づる能役者なり。先刻、妖怪のために面箱を失い、その時、懐中せし銭も失いしと思ゆれば、此酒代を明日まで貸して下されと言へば、亭主大きに腹を立ち「貸すことはならぬ。おいてござれ」と言へば、浪人「いや、某も以前は武士だ。嘘は言わぬ。貸してくりやれ」と言へば、銭も払はず、その上に大柄な事を言ふ故、亭主堪へかね、「此貧乏浪人めが。憎い事をぬかしおる」と小腕取つて引き出し、したゝかに打ちのめす。この物音に辺りの人々出で合い、よう〳〵亭主をなだめ、「早く行かつしやい」と言われ、浪人目に涙を浮かめ、「我も古は侍の一本使いなり。いかに落ちぶれしとて、素丁人の土足にかけらるゝと言ふは、先祖へ対して面箱酒代もない」。

「大騙りの大泥棒め。たゞ飲ませる酒があるもんか」

「これさ、親方□□了見してやんなせへ。これさ〳〵」

「貴様は能役者か。そんならこゝを『急ぎ候ほどに』とするがいい」

「うぬ〳〵ぶつた□。うぬは〳〵」

」（十二ウ・十三オ）

五説　旧夫の不実、新夫の誠実、黒髪の切ても切ぬゑん

昔、鎌倉雪ノ下辺の荒物問屋に、年季奉公を勤め、随分実体にして、十年の年季を勤め、礼奉公二年、首尾よく仕舞いければ、主人も喜び、店でも持たせるつもりなれど、此男の本国は信濃、国にて、跡取りが死たる故、家督を譲るとの事にて、国元の伯父来たり。主人へ右の由願ひ、「御奉公首尾よく相勤めましたらば、本国へ御返し下されかし」と頼み置きけるまゝ、長々の奉公大切に勤めた

れば、店出しの元手金として百両あて置きたり。「此金を持参なし国元へ赴き、大切に家督を相続なすべし」と、これまでの衣類他、入国への土産物、道中の路用まで心を添へられ、結構な料理にて立ち振る舞いありければ、誠に主人のお情けありがたく思ひ、旅の支度をなして信濃国へ発足なしける。さて、板橋通りより、その日は上尾通りにして、翌日桶川の宿に至り。棒端の茶屋に休、中敷を使い酒を飲み居けるが、此家の女房、年は廿一、二にて、器量よく、

つぎへ

「モシ女将さん、一つ野見宿禰としておくんならぬか。お前の美しいのには、とんと言語に当麻蹴速だ」

「いけ好かねへ客人だ」

」（十三ウ・十四オ）

まへのつゞき

愛嬌のこぼるゝようなるに、此男ふと心迷い、「我も国元へ帰らば、是非女房を持たねばならず。とても女房を持つなら、此様な女を持ちたきもの」と見れば見るほど、どふもかうもならぬくらいにのぼせける故、無性に酒を飲み、女房に「一ツ飲みなされ」と言へど、女房は、亭主の近村へ出でゝ留守の上、長々しく休み、おかしな目つきをしていやらしければ、うるさく思ひ、「私は、酒は食べませぬ」と愛想なく言へど、生れつきての愛嬌顔なれば現を抜かし、色々とすれども側へも来ぬ故、手前も少し心付き、「これはしたり。人の女房にかくまで心を奪るゝと言ふは、我ながら戯けな沙汰なり。日もたける。道を急がん」と酒代を払いて立ち出でけるが、さていかなる因縁にや、どふもこの女の事思ひきられず、道半丁ばかり行きて、ふと思ひつき、「この丁内に男を立てる人があらふ。なんでもその人を頼んで金を出だして、一晩なりとも添い寝をなしたい」と、とある屋台店の人に「此宿に立て引の強い人はあるまいか」と尋ぬれば、「此横丁の虎の吉兵衛と言ふ人は、この四五里四方の男にて、人に頼まれては一寸も引かぬ男也」と聞ゝて、大きに喜び、横丁へ尋ね行きけるに、早速知れて、折しも家に居たりければ、近づきになり、委細の物語りをなして「金子はいか程なりとも差し出だし候まゝ、是非〳〵一夜の情けを受けたし」と、頼みければ、吉兵衛も当惑なし、「貴様、先づ、よく積もつてもみ給へ。人の女房が金づくでできるものか。そんな道ならぬことを受け引く男にあらず。思い直して国へ帰るが上分別」と諫めても、「お慈悲〳〵」と泣きける故、持て余し、「そんなら貴様、五十両も惜しまず出す気か」と言へば、「随分、五十両はおろか、百両持つておりますから、皆も出します」と言へば、「そんならできるかできぬかは知らねども、話して

次へ

「ひとへにお慈悲でござります」

「欲の深い男だから、ひよつとしたらできやうもしれません」

」（十四ウ・十五オ）

みてやろう」と五十両持ちて、かの茶屋に至り。密かに亭主へ掛け合いけるところ、亭主も五十両と聞いて、たちまち欲心起こり、不得心なる女房を、家のためと無理無体に得心させて、相談決まり、吉兵衛は五十両の金を亭主に渡し、女房を連れ帰りて男に会はする時、女房の言ひけるは、「コレ吉兵衛さん。もふあの男の方へは帰りませぬ。金を出す人の心と、金をとる人の心とは大違いなれば、此お方と今からいづくへなりと行きます」と言われ、「至極道利なり。そんなら二人リ、今から逃げろ」と男に女を渡し、夜中に落としけり。それより此男、国へも行かず、また鎌倉へ出で、そちこちするうち、残りの金も使い無くし、今は前栽を売りて儚く暮らしける。殊に酒好きにて、毎日二合づゝ飲むところが、此頃は女房の銭才覚もできず、「おれ故に苦患をなさる」と頭の者まで売りて酒に変へしが、今日の酒の価なく、髢買いに髪の毛を売りて、よふ〳〵二合買ひて待つ所へ、亭主帰れば、燗をして出だすに、亭主の曰く、「銭も無いに、どふして此様に酒を買つておきし」と言へば、ありし次第を語りける。亭主涙をこぼし、「ヤレ〳〵親切な人だ。大事の髪の毛を惜しい事をした。どれ、見せさつせへ」と女房の髪の毛を握りて、「まだ二合飲める」。

「酒を飲んだら、やたら無性に、めでたくなつてきた。あア、めでたし〳〵〳〵」

美丸画

竹塚東子作

」（十五ウ）

謝辞

本翻刻は、山口県立大学国際文化学部文化創造学科日本文化研究室の菱岡憲司先生が開催する自主ゼミに参加させていただき、同ゼミに参加する学生の皆さんと一緒に読み解いたものである。菱岡先生のご指導のもと、学生の皆さんのご協力を賜り執筆ができましたこと、ここに御礼申し上げます。なお、本翻刻の文責は筆者のみが負うものである旨、申し添える。

A Reprint and Explanatory Notes of *Kokkeikidan Owaraigusa*

YOSHIOKA Kazushi